View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Konan University Repository

KONAN UNIVERSITY

＜退職記念講演＞甲南大学での36年 ： 研究・教育・大学をふりかえって

著者	小島 修一
雑誌名	甲南経済学論集
巻	52
号	3・4
ページ	195-212
発行年	2012-03-20
URL	http://doi.org/10.14990/00001448

甲南経済学論集第52巻第３・４号　2012年３月

〔退職記念講演　2012年２月24日〕

甲南大学での36年
――― 研究・教育・大学をふりかえって

小　島　修　一

Ⅰ はじめに

私は今春（2012年３月）、退職します。1976年４月に着任しましたので、甲南大学で36年間教えたことになります。退職を前にして、甲南大学でのこれまでの私の仕事を振り返り、その内容を整理し書き留めておこうと、かなり以前から考えていました。そのような時に計画されたこの講演会は、目標を与え、大きな動機づけとなりました。今日はその書き留めたものを、ここで報告したいと思います。私のお話しが、特に若い人々にとって何らかの参考になれば幸いです。

時間の制約がありますので、研究・教育・大学の三つに分けて、お話したいと思います。まず、研究面から始めます。

Ⅱ 研究について

私の専門分野は、ずっと「ロシア経済史、経済思想史」でした。なぜロシアなのか。私がこの分野を選んだのは、1960年代末の学部学生の時です。そのきっかけは、田中真晴先生の著書『ロシア経済思想史の研究』（ミネルヴァ書房、1967年）との出会いでした。当時、日本ではロシア（ソ連）という国の重要性にもかかわらず、この国に関する学問的研究においては「未踏」の分野が数多くありました。それだけ一層、若い研究者にとっては未開拓の領域を自由に切り開いて行ける可能性が残されていました。

田中先生のお仕事は、これまでの日本の通説的なロシア・ソヴィエト史像を大きく書きかえる新鮮な研究でしたので、20代前半の私はそこから大きな知的刺激を受け、ロシア世界の面白さに取りつかれてしまいました。早速「ロシア語の原蓄」を独学で始め、ロシア語の本を集めることになりました。大学院に入った頃、松田道雄先生を中心とする、京都のロシア研究会（現ロシア・東欧研究会）で田中先生に初めてお会いし、その後は直接ご指導を受けることができました。

さらに私は、ロシアについて知れば知るほど、日本ではあまり考えられないような出来事がこの国でたびたびおこっていることに、大きな驚きを感じるようになりました。この驚きという点について、マックス・ウェーバーは『古代ユダヤ教』の中で、「世界の動きに驚く能力こそが、その動きの意味を問うことを可能にする前提条件である」と述べています。こうした「驚き」の連続が、より深いところで、私のロシア研究の推進力となってきたように思います。

例えば、20世紀のロシアに見られた、崇高な理想主義・献身的な生活態度と徹底したマキャベリズム、途方もない暴力の支配と膨大な数の犠牲者、「超近代」的な体制のもとでの「前近代」的な共同体原理の持続、などです。これら全てに対する「驚き」や「何故」という問いが、ロシアへの関心を一層深めるとともに、より広く人間存在の現実や「世界の動き」について考える、大きな刺激となりました。

このように、未開拓領域への挑戦と知的な驚きの連続とが、ずっと私の研究の原動力であり推進力でした。けれども専門研究を行うには、対象をもっと絞り込まなければなりません。そこで数年の模索の後に、やっと自分の研究課題を見つけることができました。それは、「ネオ・ナロードニキのロシア農業論」というテーマです。この課題発見においては、当時岡山大学におられた保田孝一先生から貴重な助言をいただきました。

「ネオ・ナロードニキ」とは、ロシア社会の内発的な発展をめざす19世紀ナロードニキ思想を20世紀初頭に再生・発展させた人々のことです。彼らはとりわけ農村研究に大きな影響を与え、革命後の1920年代においてもロシアの農村・農業研究に指導的な役割を演じていました。20世紀初頭のロシアは、当時の世界では最も農村・農業研究が盛んな国の一つでしたが、その中心にいたのが、チャヤーノフをはじめとするネオ・ナロードニキの農業経済学者です。

ロシアはソヴィエト期に工業化されるまでは長く農民国・農業国でしたので、ネオ・ナロードニキによる農村共同体や農民経済の研究は、ソヴィエト社会の歴史的基盤を解明するうえでも極めて重要な資料となります。ところが、彼らの多くは1930年代に国家による大きな迫害を受け、それ以後本国ロシアでは、ネオ・ナロードニキ研究は長くタブーとなりました。つまり、当時はロシア人の研究者が取り扱えないテーマだったのです。また欧米諸国でも、ネオ・ナロードニキはまだ誰もほとんど研究していないテーマでした。

これは、日本の若い研究者にとっては大きなチャンスです。そのように考えて、私は早速彼らの著作や関連文献のリストを作り始めました。また必要な資料は保田先生からお借りしたり、ソ連、イギリス、アメリカの図書館からも集めました。1978年に西ドイツに留学（後述）した時も、ベルリンやキールをはじめとする各地の大学・図書館で資料収集に没頭しました。

私は、このようにして集めた文献をノートを取りながら読み進み、ネオ・ナロードニキの代表的な農村研究者について、北海道大学のスラブ研究センターや学会、研究会などで報告を行い、またいくつかの論文を執筆しました。こうした一連の研究成果をまとめたものが、最初の著書『ロシア農業思想史の研究』（ミネルヴァ書房、1987年）です。私がちょうど40歳になった時のことです。このネオ・ナロードニキ研究を通して私は、伝統的なロシア農村社会の独自なシステムを多少なりとも解明することができたと考えています。

拙著は幸いにも多くの書評に恵まれました。またこの書によって私は1988年３月、東京大学から経済学博士の学位をいただきました。さらに、予想外のことがおこりました。偶然にもこの書の出版の数ヶ月後（1987年８月）に、ペレストロイカ最盛期のソ連でチャヤーノフたちの名誉回復が行われ、日本での私の研究も注目されたことを知ったのです。また、この年の11月には、名誉回復運動を指導していた、農業集団化研究の権威V.P.ダニーロフ氏が来日し、甲南大学でも講演会が開かれました。

この書を出した頃、東京大学の肥前栄一先生から、日本とロシアの経済発展を比較するための、日ソ両国の研究者によるワークショップの話がありました。私はこの問題にも大きな関心を持っていましたので、すぐに参加を決め、研究テーマの設定を始めました。色々と考えた末、「帝政末期ロシアの農民出稼ぎを同時代の明治日本と比較する」というテーマを選びました。それは、ロシア農民の出稼ぎの多さに注目したからです。

早速、科研費を得て準備に取りかかったのですが、ちょうどその時、学部での在外研究の順番がまわってきました。そこで、ロシア労働史の大家、レジー・ゼルニック氏を長谷川毅先生（北海道大学スラブ研究センター、カッコ内は当時の所属を示す。以下同様）から紹介していただき、ゼルニック氏のいるカリフォルニア大学バークレー校に受け入れをお願いしました。こうにして私は1989年４月から1990年３月までの１年間、同大学のスラブ東欧研究センターの客員研究員としてアメリカに滞在することとなりました。

バークレーには多くの著名なロシア研究者と並んで、ベラー、スミス、スカラピーノといった優れた日本研究者、またウェーバー研究で有名なベンディクスもいましたので、私は彼らに会見を申し入れ、「日本とロシアの近代化の比較」について用意した質問を投げかけました。またバークレーの図書館や他大学からの借入れを通して、ロシアの農民出稼ぎに関する資料・文献を集め、読み進みました。私はこの成果を翌1990年、英語論文にまとめ、国

際学会で報告しましたが、この点については後で述べたいと思います。

私はこの後、1993年から１年間、甲南大学から国内研究の休暇を与えられましたので、その機会を利用してもう一度バークレーで研究することを決めました。こうして結局、私は合計２年間アメリカに留学することになりました。この２年間私はアメリカで、帝政末期からソヴィエト初期のロシアで出た経済文献を積極的に収集しました。しかしそれと同時に、この２年間のアメリカ留学中に新しい問題関心が私の中で芽生え、次第に膨らんでいきました。それは、「ロシアの市場移行」という問題です。その背後には、次のような個人的経験がありました。

私が留学した1989-90年と1993-94年は、ちょうど東欧革命、ペレストロイカ末期とソ連崩壊後の急激な市場移行期とにそれぞれ重なっていました。そのため、当時のバークレーのキャンパスではロシア・東欧関係の研究集会が毎週開かれ、一般市民の参加も数多く見られました。ロシア・東欧に関する講義は活況を呈し、学生の質問によってしばしば中断されるほどでした。また、ロシア・東欧からも多くの研究者が訪れ、アメリカにいながら本国の第一級の研究者から直接話を聴くことができました。その中には、上述のダニーロフ氏も含まれています。

私はこれらの講義やセミナーにはできるだけ多く参加し、アメリカ学界の活気に満ちた空気に触れることによって、大きな学問的刺激を得ることができました。このような経験から私は次第に、当時進んでいた「ロシアの市場移行」という長期の歴史的プロジェクトについて、これをロシア経済史の枠組みの中で考えることに大きな関心を抱くようになったのです。これまでロシア経済思想史を研究してきましたので、ひとまずこの文脈の中に「ロシアの市場移行」という問題を投げ入れ、ロシアの経済学者たちがこの問題をどのように考えてきたのかについて、新たな研究を始めることを決めました。

ロシアの市場経済移行の試みは、実は過去二度見られます。最初は帝政末

期の1906年から始まるストルイピン改革であり、次はソヴィエト初期の1921年から始まるネップ（新経済政策）です。この二度の試みはいずれも「失敗」に終わりましたので、今日ロシアは半世紀以上経過した後に、同じ課題に三度目の挑戦をしていることになります。ロシアの経済学者の中で市場経済化を主要な関心事としていたのはリベラル派の経済学者でしたので、過去二度の市場移行期を生きた彼らが当時、「ロシアの市場移行」をどのように捉えていたのか、そして市場経済を原理的に否定するソヴィエト体制の出現をどのように受け止めていたのかという問題関心が、私をとらえるようになりました。

こうして、1990年代半ば以降はリアルタイムで同時代のロシアの市場移行を観察しながら、20世紀初頭ロシアのリベラル派経済学者の著作を読み進める、という作業が始まったのです。リベラル派の多くはソヴィエト政権によって亡命を余儀なくされたので、「亡命のロシア経済学」という新しいテーマが私の研究課題の一つとなりました。ロシア人亡命経済学者たちの仕事は欧米のソヴィエト経済研究のルーツとなったこと、またより若い世代はアメリカに亡命し、そこで才能を開花させたことが知られています（例えばレオンチェフ、クズネッツ、ドーマー、ガーシェンクロン）。このテーマの重要性は明らかです。

ネオ・ナロードニキ研究をしていた1970-80年代とは異なって、私がこの新しい課題に取り組んだ1990年代以降は、何人かの若い研究者（例えばドイツのJ.ツヴァイネルト氏、イギリスのV.バーネット氏、立命館大学の森岡真史氏）が、すでにロシア経済思想史の研究に取り組んでいました。そこで私は彼らと連絡を取り合い、その研究成果を大いに利用することができました。また本国ロシアでも、これまで無視されてきた自国の経済学者の著作が相次いで復刊され、研究も出始めました。こうした最新の学界動向を踏まえて私の研究成果をまとめたのが、第二の著書『20世紀初頭ロシアの経済学者群像』

（ミネルヴァ書房、2008年）です。私の還暦の翌年に、これを出しました。

私はこの書でまず、ロシア経済学の最盛期（1900年～1930年）の学問的遺産を俯瞰しました。次に、ほとんど研究がなかったブルツクス、リトシェンコ、プロコポーヴィチなどの経済学者にスポットライトを当て、ロシアの市場移行やソヴィエト体制に関する彼らの認識構造を明らかにしました。さらに、亡命経済学者の仕事が、戦後欧米の「ソヴィエト学」やハイエクの社会主義批判の原型となったことを示すことができたと思っています。幸いなことに、この書についても多くの書評が専門誌に掲載されました。

この他のテーマについても、試論的なもの（例えば、農家労働力移動の日露比較）をいくつか発表してきましたが、以上の２冊の著書『ロシア農業思想史の研究』『20世紀初頭ロシアの経済学者群像』が、私のまとまった研究成果と言えるものです。しかしもう一つ、独自な研究ではありませんが、私が加わった大きなプロジェクトについて、ここで述べなければなりません。それはウェーバーのロシア革命論文の翻訳です。

周知のように、ウェーバーはロシアの1905年革命について２本の大きな論文を書いています。また1917年の２月革命についても、２本の小論文を書いています。これらの論文は1969年に抄訳が出ましたが、極めて不十分なものでした。そこで名古屋大学出版会の後藤郁夫氏から肥前栄一先生に、1989年に全集版のロシア革命論文が出たのを機会にウェーバーのロシア革命論文を全訳する（これは世界で最初の試みです）、という企画が提案されました。そして肥前先生から私にも、このプロジェクトへの参加依頼がありました。私は学部時代からウェーバーを読んできたのでもちろん参加を決め、約10年間、このプロジェクトに関わることになりました。

とはいえ、ウェーバーのロシア革命論文は膨大な分量です。そこで翻訳者は二つのチームに分かれ、私は肥前栄一先生、鈴木健夫先生（早稲田大学）、佐藤芳行氏（中部大学）とともに、最も長大な第二論文「ロシアの外見的立

憲制への移行」（これは日本語にして300頁を越える長さです）を翻訳する仕事に加わりました。八王子の大学セミナーハウスなどでたびたび合宿を行い、時には激論を交わしながら翻訳文の相互検討を重ねました。そして1998年、私たちの共同作業の成果は『ロシア革命論 II』として公刊されました。ウェーバーの極めて難解な（少なくとも私にとっては）ドイツ語を丹念に読み、訳語や訳文を相互に検討するこの仕事は、本当に貴重な経験となりました。そして何よりも驚嘆したのは、ウェーバーの視野の広さ、考察の深さ、洞察の鋭さです。お読みいただくと分かりますが、ウェーバーはロシア社会が当時直面していた根本的な問題（農業問題、民族問題、法治の欠如など）を的確に把握し、鋭い分析を行っています。なおウェーバーについては、また甲南大学のウェーバー研究会のところで、もう少しお話したいと思います。

さて、これまで述べてきたように、(1)ネオ･ナロードニキのロシア農業論、(2)ロシアの経済学者の市場移行やソヴィエト体制に関する把握、(3)ウェーバーのロシア革命論文の翻訳、この三つが研究面での私の主な仕事です。さらに、こうした研究と同時並行的に、私は国際的な学術交流においてもいくつか仕事をしてきましたので、次にこの点についてお話したいと思います。

1973年にドイツ語研修のために西ドイツに滞在したのが、私の最初の留学体験です。その5年後の1978年、DAAD(ドイツ学術交流奉仕会)の研究助成を得て、この国のロシア・東欧研究の動向を調べるために再び西ドイツに留学しました。この時は西ベルリンに滞在しながら、ベルリン自由大学やミュンヘン、ケルンなどの東欧研究所を訪問し、研究者たちからドイツでの研究動向について聞き取り調査を行いました。また、留学前に私が作っていた資料を用いて、日本のロシア研究の状況を彼らに説明しました。それと同時に、ドイツの大学や図書館で、古いロシアの経済文献を収集する仕事も続けました。Ostforschung（東方研究）と呼ばれるドイツのロシア・東欧研究は、当時の日本ではあまり知られていなかったので、留学の成果を京都の研究会で

報告し、それをまとめて「西独の東欧研究覚え書」(1979年) を書きました。

私の留学とちょうど同じ時期に、同じ経済学部から山口和男先生もベルリンに留学しておられたので、家族ぐるみで楽しく交流したのを覚えています。また、ベルリン自由大学のヘルムート・ワーグナー先生からは、私の留学に際して多くのご支援をいただきました。ワーグナー先生とも家族ぐるみで交流し、その後も交流は長く続いています。先生とはこの後、シカゴ、ベルリン、京都、神戸などでたびたびお会いすることができました。また、2010年にドイツで出版されたワーグナー先生の記念論文集には、私も「戦後日本のヨーロッパ像」に関する英語論文を寄稿しました。

ドイツから帰国後数年して、ドイツの権威ある専門誌『東欧史年報』に日本のロシア史研究の動向を紹介するドイツ語論文を書くというプロジェクトが、肥前先生と鈴木先生から私に提案されました。上述したように私もドイツ留学前に、日本の研究動向に関する資料を作っていましたので、数年間この共同事業に参加することになりました。その成果は1985年、「過去及び現在における日本のロシア史研究」として『東欧史年報』に 2 回に渡って掲載されました。間もなくドイツから論文の抜刷が送られてきましたので、私たち三人は分担して、そこで紹介した日本の研究者に送り、また私はドイツで会った研究者たちにも抜刷を送りました。この共同事業は、ロシア研究における日独交流にわずかでも貢献できたものと思っています。

1980年代後半、私は次の留学先をアメリカに決めました。アメリカは何よりもロシア・ソヴィエト研究の中心地だからです。まず1987年の夏、イリノイ大学で行われたスラブ研究セミナーに参加しました。アメリカ本土に入ったのは、この時が最初です。イリノイ大学では何人かのロシア研究者と知り合いになりました。またこの時はワシントンD.C.にも行き、そこにある議会図書館の書庫に入れてもらって文献を集めました。さらにロシア・ソヴィエト研究の中心機関であるケナン研究所を訪れ、そこで幸運にも、日露比較近

代化論の中心にいたプリンストン大学のブラック教授と会うこともできました。

翌1988年、ハワイのホノルルで開かれたアメリカ・スラブ学会（正式名称は「アメリカ・スラブ研究促進協会」AAASS）の年次大会に出席して、ゼルニック氏と初めてお会いし、また何人かの知人も得ました。この年、翌年のアメリカ留学にそなえて、「戦後日本の総合雑誌に見るソ連像の変遷」というサーヴェイ論文を、甲南大学の欧文紀要に英語で書きました。アメリカの研究者への「贈り物」を作るためです。そして1989年から１年間、私はその論文の抜刷をもって、できるだけ多くの研究者と会うように努めたのです。1989年といえばアメリカとは対照的に日本経済がバブルで絶好調の年でしたので、日本への関心も高く、日本のロシア研究に関心を持つ学者も少なくはありませんでした。なかでも、私からも聞き取りを行ったプリンストン大学のロズマン氏は、専門的にこの研究を進め、1992年には著書『ゴルバチョフ時代への日本の反応』を出したほどです。なんとその副題は、「興隆する超大国が衰退する超大国を見る」となっています。

アメリカから帰った後、私は今度はアメリカのロシア研究の最新の動向を日本の研究者に紹介する仕事を始めました。そのためにロシア史研究会創立40周年記念集会で報告を行い、また３本の紹介論文を書きました。「ソ連の崩壊とアメリカのロシア研究」（1995年）、「アメリカにおける近代ロシア経済史研究の一動向」（1996年）、「ロシア史研究の新しい課題 —— 最近のアメリカ学界の動向から」（1996年）が、それらです。

さらに、英語での世界への発信の必要性を痛感した私は、21世紀に入ってからは自分の日本語論文を英訳し、欧文雑誌やロシア経済思想史に関する二冊の国際的論文集『ロシアにおける経済学』『ユートピアから社会工学へ —— ロシア経済学・統計学の歴史』に寄稿しました。私の論文に関心を持ったヨーロッパの研究者からコンタクトを求められ、現在もメール交換が続い

ています。

国際交流に関しては最後にもう一つ、ここで述べておかなけれならないものがあります。それは、先に少し触れた日ソ経済史家の共同研究プロジェクトです。このプロジェクトは、「19世紀末―20世紀初頭のロシアと日本の比較経済史」というテーマで、速水融先生（慶応義塾大学）、中村隆英先生（東洋英和女学院大学）、ソ連科学アカデミーのヴィノグラードフ氏、フルシェンコ氏が中心となって組織されたものです。日本からは、肥前栄一先生、鈴木健夫先生、斎藤修先生（一橋大学）らも参加しました。1989年10月に東京で、1990年５月にはレニングラード（現サンクトペテルブルク）でそれぞれワークショップが開かれ、1990年８月にベルギーのルーヴァンで開かれる第10回国際経済史学会でその成果を発表する、というプロジェクトでした。私は東京でのワークショップはアメリカ留学中のため欠席しましたが、レニングラードとルーヴァンの学会には参加して、報告を行いました。それは、バークレーでまとめた「帝政末期ロシアにおける農民の都市への出稼ぎ ――日本の経験との比較」という英文ペーパーです。

この日ソ共同プロジェクトから私は実に多くのことを学びましたが、最大の収穫はロシア人研究者たちと知り合いになったことです。なかでも親しくなったのは日本史のユリヤ・ミハイロヴァ氏（レニングラード東洋学研究所）とロシア史のボリス・ミローノフ氏（レニングラード大学）の二人です。ミハイロヴァ氏は後に日本のキャノン財団の研究助成プログラムで来日し、甲南大学の客員研究員として研究を続けた後、広島市立大学の教授となって現在では国際的な活躍を行っています。またミローノフ氏はロシア社会経済史の第一人者で、早稲田大学と北海道大学の客員研究員として二度来日し、1992年には甲南大学でロシアの経済危機について講演をしていただきました。後にその講演原稿は、私が翻訳して『甲南経済学論集』に掲載されました。

1990年代にはこの他に、私がアメリカで親しくなったアンドリュー・バー

シェイ氏（カリフォルニア大学バークレー校）にも、日本の社会科学について日本人以上に流暢な日本語で講演をしていただきました（1996年）。この講演会には名誉教授の杉原四郎先生も来られ、翌日甲子園のホテル・ロビーで杉原先生、バーシェイ氏、私の三人で歓談の時を持ったことを覚えています。

以上が、これまで私が行ってきた研究活動のあらましです。すでに述べたように、私は肥前栄一先生、鈴木健夫先生と三度の共同作業を行ってきましたが、それらが実にタイムリーに私自身の仕事と結びつく結果となりました。例えば、ドイツ語で日本の研究動向を紹介する仕事は、私のドイツ留学のすぐ後に来ています。また、ウェーバーの論文「ロシアの外見的立憲制への移行」の共訳作業は、「ロシアの〔外見的〕市場経済への移行」という私の問題関心と結びついていました。これらの共同プロジェクトが私自身の研究への大きな助けとなったことに対して、肥前・鈴木両先生には心から感謝しています。私の研究活動をこのように振り返っていきますと、自分の仕事がいかに多くの研究者から学恩を受けてきたかが分かります。

Ⅲ 教育について

これまでは、私の研究活動を振り返ってきました。次に教育面での仕事について、お話したいと思います。私は小クラスの授業では、ゼミ、基礎ゼミ、「英語で読む経済」などを担当してきました。また講義では、初めの頃は農業経済学、その後では西洋経済史や広域副専攻科目の「歴史と経済」、入門講義の「経済の歴史と思想」などを受け持ってきました。

私の場合、こうした教育活動が研究内容と直接結びついていた時期がありました。それは、1980年代後半から1990年代にかけてです。この時期にロシアは、ペレストロイカの開始からソ連の崩壊に至るまでの激動の時代をむかえました。そのため、学生のロシアへの関心は高まり、私のゼミではリアル

タイムでペレストロイカの行方を追っていました。また1986年のインナーゼミナール大会では、ゼミ生が同年に起こったチェルノブィリの原発事故について報告しました。広域副専攻科目の授業でも、「歴史の中のソヴィエト社会主義」について数年間講義をしていました。この講義では、イギリスのBBCや日本のNHKが作ったドキュメンタリー・ビデオを活用しました。東欧革命やペレストロイカの現実を見た学生たちの反応を、その都度出してもらった感想文を通して知るのが楽しみでした。しかしその後は、学生のロシアへの関心は低下して、授業でロシアを取り上げることはほとんどなくなりました。

けれども、たとえ教育と研究とが直結しなくなっても、研究者としての私にとって、教育活動は次のような二つの大きなメリットをもたらしてくれたと考えています。

その一つは、講義準備のための幅広い読書が専門研究に役立ったということです。論文を書くためにはまず読まないであろう書物を、講義の準備のために読む、そのことが意外にも専門研究の土台的、背景的な知識として役立ちました。例えば、日本の農家経営の知識はチャヤーノフ理論を、イギリスの囲い込み運動の歴史はロシアのストルイピン改革を、また中国の人民公社はソ連の農業集団化を、それぞれ理解するうえで有益でした。

二つ目は、授業で学生にできるだけ分かりやすく説明しようとした努力が、明快な文章の論文を書く技能の向上に役立ったことです。知ってはいても、うまく説明できない、ということは日常よくありますが、これはまだ完全に理解していないためです。だから教えることは学ぶこと、人に説明することはきちんと自分で理解すること、に繋がります。こうして教室は、私にとっては論文執筆、学会報告のトレーニングの場となりました。

しかしそうはいっても、教育は研究とは異なる独自の目的を持っています。それは何よりも、「学生第一」でなければばりません。私は教師として色々

な経験をした後、大学教育は最低限、その学生が社会に入って活躍できるような知的訓練の場でなければならない、と考えるようになりました。そう考えて私は、授業の最初にはいつも、「教室はこれから社会に出て行くための準備の場です」と学生に話すようにしてきました。

卒業後、学生は厳しい社会の中で生きていかなければなりません。現代の社会は、ますます複雑化、グローバル化し、変化も激しくなってきています。したがって、そのような社会に入っていくには、「世の中」の動きがどうなっているのか、なぜそうなのか、を知ることが不可欠です。現代世界を大きく動かしているのは間違いなく経済の力ですので、経済学部での学習は、このような現代世界に関する知識の獲得に絶好の機会を与えてくれます。そう考えて私は、自分の全ての授業をこのように方向づけ、現代世界を理解するための方法として作ってきました。

また学生は、激しく変動する世界の中で生きていく主体的、実践的な知的能力（例えば自己学習能力、コミュニケーション能力）をも、同時に身につけなければなりません。そのために私はかなり前から、１年生の基礎ゼミの授業にディベートを取り入れてきました。これがかなりの成果を収めたので、2003年度から思い切ってゼミを完全にディベート・ゼミに切り替えました。私の「自己評価」では、これは大成功でした。ディベートは勝ち負けを決める、フェアで知的な競技です。そのためゼミ生は「雇用の流動化」、「消費税引き上げ」などのテーマについて積極的に資料を集め、自発的に班での打ち合わせを行います。そして敗北や失敗を何度も重ねながら、ディベートを数多く経験する中で、次第にそのスキルを向上させていきます。しかも単にスキルを身につけるだけではなく、自分の頭で考えるようになります。最後には私も驚くほど、ゼミ生はディベート能力を高めていきました。

またゼミ生はずっと議論をしていますので、飲み会でもディベートが続くほどです。そのため皆が非常に親しくなって、ゼミ生同士で海外旅行に行く

こともあり、カップルも誕生しました。さらにディベートで培った能力は就職活動でも力を発揮し、多くのゼミ生が希望する会社に就職することができました。そのうえ卒業後も交流を続け、盆休みや年末には「同窓会」を開き、私を招いてくれました。久しぶりに会った元ゼミ生の成長した姿を見ると、本当にうれしくなります。

教育活動に関しては最後に、教師の「役得」についてお話したいと思います。大学でいつも18歳から22歳までの若い学生と接していますと、自然と気分も新鮮となり気持ちも若くなります。私はこの「役得」を、年齢を重ねるほど実感するようになりました。また学生の最大の関心事は、自分たちが活躍する10年後、20年後の世界がどうなっているかにありますので、常に彼らの眼は未来に向けられています。私もその影響を受けて、現在の学生たちが定年を迎える21世紀半ば頃の世界はどのようになっているのかについて、多角的･複眼的に考えるようになりました。こうした未来への関心も、「役得」の一つと言えるかもしれません。

Ⅳ 大学について

最後に、大学についてお話したいと思います。私は1976年４月、29歳の時に専任講師として甲南大学で教え始めました。当時はキャンパスの真ん中（現在の図書館のある場所）に藤棚とテニスコートがあり、全体におっとりとした雰囲気を感じたことを思い出します。経済学部の教員は18名で、研究室は昔の９号館の中にありました。かつて教室として使われていた大部屋を壁で間仕切った研究室で、各部屋には旧式のアラジンの石油ストーブが置かれていました。また経済学部には旧制甲南高校の教養主義の伝統が残っていて、「経済学部歴史学科」と言われるほど、歴史への関心を持つ先生方が多くおられました。ゼミではJ.S.ミルやシュムペーターなどの古典が読まれていました。私も最初のゼミでは、甲南学園理事長の吉沢先生、次期学長の杉

村先生らが当時翻訳されたカール・ポラニーの『大転換』を学生と一緒に読みました。

33年間続いた甲南大学ウェーバー研究会は、この甲南教養主義の伝統を受け継ぐものかもしれません。この研究会は、1979年に山口和男先生が中心となって経済学部の藤本建夫氏と私、法学部の小笠原弘親氏と黒田忠史氏の5名で始めた読書会です。

これは月一回の例会を持ち、ウェーバーの著書を読みながら自由に議論を行い、たびたび現代の問題まで論じる、というスタイルの研究会です。ウェーバーの時代制約性やウェーバー的アプローチの弱点が議論されることもありました。参加は全く自由で、会費や明文化された規則もありません。土曜日の午後2時から始まり、6時頃まで議論が続く時もありました。これまでに、ウェーバーの『儒教と道教』『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をそれぞれ2回読み、その他に『宗教社会学』『ヒンドゥー教と仏教』『古代ユダヤ教』『政治論集』『ロシア革命論』『古代社会経済史』『一般社会経済史要論』『音楽社会学』など、20冊以上を読んできました。またドイツからはJ.ヴァイス氏、アメリカからはS.コールバーグ氏、大阪大学からはW.シュヴェントカー氏などに来ていただいて、講演会を持ったこともありました。さらに私たちは、そのコールバーグ氏の著書『マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学』を出版直後に翻訳し、1999年にミネルヴァ書房から出しました。

この研究会は開かれた会ですので、これまで例会には文学部の先生方や他大学の大学院生、ポスドクの若い研究者、元新聞記者の方の参加もありました。最近では、神戸大学など近隣大学を定年退職された名誉教授の先生方も来られ、毎月読書会が続いていましたが、先月（2012年1月）の例会で研究会は活動を終えました。33年間、この研究会でウェーバーの著書を議論しながら読んだ経験は、私自身のロシア研究にとっても本当に役立ったと思ってい

ます。

甲南大学の教養主義の雰囲気も、次第に変わり始めました。私がそう感じたのは、1990年３月に最初のアメリカ留学から帰国した時です。学内が留学以前と比べて忙しくなり、「シラバス」「オフィスアワー」「自己点検自己評価」「ＦＤ」といった言葉をさかんに耳にするようになりました。私がバークレーで入手したいくつかの講義シラバスを、学部内にできた授業方法の研究会で紹介したのも、この頃のことです。

こうした教育改革の大きな波と並んで、1995年１月17日に、阪神淡路大震災が大学を襲いました。ちょうどこの日は、後期試験が始まる日でした。もし地震が夜明け前ではなく、多くの学生が受験する午前10時頃に起こっていれば、大惨事になっていたと思われます。甲南大学は教育棟の多くを失い、予定されていた後期の定期試験は中止となりました。地震の日から数年間、キャンパスは騒然とした雰囲気に包まれました。壊れた校舎の解体、仮設校舎の建設、新校舎の建設が相次いで行われたからです。私の研究室も本棚が倒れ、書物が散乱して、まさに「本の海」状態となりました。また自宅も全壊し、当時は転々と住む場所を変えていました。

そしてこの大震災の翌年から、私にも大学の役職がまわってきました。まず1996年に、学生相談室長になりました。1997年には、この室長を兼務する、初代のカウンセリングセンター所長に就任し、２年間、センターの建物の建設準備と活動開始の仕事に関わりました。カウンセリングセンターの仕事の関係で、心理学・精神医学の大家、河合隼雄先生、中井久夫先生にお会いすることができたのはこの時期です。

その後、1999年４月から2001年３月までの２年間、経済学部長に就きました。ちょうど世紀交替期にあたっていて、20世紀最後と21世紀最初の教授会の開会を、それぞれ「宣言」したことを思い出します。行政職は私にとって最も不得意な分野でしたが、さらに私の任期中には全く予想していなかった

出来事がいくつもおこりました。にもかかわらず2年間、学部長の職務を何とか全うすることができたのは、学部教職員の方々の支えがあったからだと感謝しています。

V 終わりに

これまで、36年間にわたる甲南大学での私の仕事を振り返って見てきました。36年といえば長いようですが、私にはとても短くに感じられます。それはおそらく、時代の変化があまりにも激しかったからでしょう。とりわけ1980年代後半以降は、1991年のソ連崩壊、2001年の同時多発テロ、2008年のリーマン・ショックなど、「新しい現実」が次から次に現れました。これからも世界は激しく変わっていくことでしょう。退職後も私は、こうした「世界の動き」に対する新鮮な「驚き」の気持ちを持ち続けたいと思っています。私たちの子供や孫の世代が生きる21世紀の世界が、そしてロシアの将来が今後どのようになっていくのかを、ずっと観察し続けていきたいと思うのです。また、こうした変化の時代を生き抜く知恵や心構えを、人類の叡智の結晶と言える古典から学び取っていきたいとも考えています。

最後に一言、感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。私はこれまでの人生の半分以上を、甲南大学を中心に過ごしてきました。その途上で、優れた恩師や良き先生・先輩・同僚に恵まれました。また明るくフレンドリーな数多くの学生と会うこともできました。本当によかったと思っています。36年という長い間、私のようなものを支援してくださった多くの方々に心から感謝しております。有難うございました。